

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

オオカミに立ち向かう：
モンゴルの宿営地を守る勇猛果敢な狩猟犬
(イヌと人間：パートナーの文化誌 = DOGS : AS
OUR PARTNER)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5639



ウマのたてがみ切り作業の日。1列に並んで進む男たちを、イヌが先導するかのようだ

これまででモンゴルではイヌに名前はないと思われてきたが、実際にはほとんどの牧民がイヌに固有名をあたえている。家畜にはほとんど名前がないことと対照的に、人のそばにいて家畜ではないイヌには名前があってもよいであろう。ただし、人名とまったく原理が異なっている。区別のための名前とはいえない。近隣のすべてのイヌが同一の名前であってもかまわないのである。

たとえば、ある固定施設を利用して二八戸が集住しているところで、飼われている二匹のイヌの名前を調査したところ、ブルゲド五、ホイログ三、ションコル二、シルゲ二などかなり共通するものがみられた。近隣のイヌの名前が共通しているも、人びとはまったく混乱しない。隣のイヌと名前が同じであることさえも実は知らない。つまり、名前があるといっても、呼べばイヌが答えるといった呼び名ではないので、他人のイヌの名前を聞いたことがないのである。他人のイヌは恐ろしいばかりで、名前を知りたいという気もおこらないらしい。

イヌの名前

「さえてくれ」と大声を張りあげることになっている。モンゴルでは、定型的挨拶の第一声がイヌに関係するわけである。この習慣は、イヌが家人でない人に対して猛然と襲いかかる可能性があることを表わしている。と同時に、イヌがヒツジなどの群れについて放牧にできるのではなく、家そのものに付随して、宿営地の領域の入口に示す。

オオカミに立ち向かう モンゴルの宿営地を守る勇猛果敢な狩猟犬

文・写真=小長谷有紀

それぞれに猛禽類の名前を与えられ、家畜を襲うオオカミを追いかつ勇猛果敢なモンゴルのイヌたち。牧羊犬や猟犬としての働きこそするわけではないが、彼らは牧民たちにとって心強き味方として、常に人間のそばに生きてきた。



牧羊犬ではないイヌ

モンゴル語で「マル」という言葉は、一般に家畜と訳されるが、それが指し示しているのは、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダという五種類の群居性有蹄類である。まさに牧畜される家畜だけを意味しており、この概念のなかにイヌは含まれない。

イヌは、生業の対象である家畜よりも、人のそばにいる。イヌの死に際して、イヌの尾を短く切って埋葬する、そうして「イヌを人にしてやるのだ」と語るモンゴルの老人がいた。かつては人の埋葬にまでお伴して、冥界への先導役をたしめたこともあったイヌは、いわば家畜と人とのあいだにいる。

しかし、だからといって、しばしば想像されてきたように牧羊犬として活躍するわけではない。群れから逸脱しようとする個体に吠えかかり、群れをまとめるといった芸当は、モンゴルのイヌにはできない相談である。けっして牧羊犬ではないという事実は、モンゴルにかぎらず中央アジア、トルコまで遊牧民のあいだで広く共通している。

一般にモンゴルで多いのは、黒と茶のまじった毛色で、目の上に黄色い毛があるために、いわゆる四つ目になっており、巻き尾で、立て耳である、という(梅棹忠夫著『モンゴル研究』)。その容姿はいかにも牧羊犬らしくみえるかもしれないが、実のところ呼び鈴の代わりになるくらいのものである。人の家を訪問した時には、まず「イヌを見てくれ(『取り押



他人には激しく吠えたてるイヌも、家族には従順な愛犬である。相手が子どもであってもご覧のとりのさま



イヌは子どもたちにとってよき遊び相手なのだろう



内蒙古自治区シリントホ市郊外に住む人とイヌたち



モンゴルでポピュラーな黒、茶のイヌ

ウマで人が近づくと、イヌが飛び出し吠え続ける (内蒙古自治区シリントホ盟西ウジムチン)

家人が出てくると吠えるのをやめた



呼び名でもなければ、区別するという役もはたさないイヌの名前は、いったい何のためのものなのだろうか。少なくとも、きわめて定型的な名前であることだけは理解できる。こういう名前にしておくものだ、というお決まりの名前があつて、人びとはその選択肢のなから取捨しているにすぎない。

しかも、奇妙なことに選択肢のほとんどが鳥に関係している。先の例では、ブルゲドが鷹で、シヨンコルが鷲、ホイログも鳥の名といわれ、シルゲイは翼の意とみなしてよい。このほかに、カルデイあるいはハンガリトなどとよばれる鳳おう、つまり想像上の鳥であることも多い。いわゆる猛禽類のイメージが浮かぶ名前が一般的であるといえよう。

空を飛んで獲物を狩る鳥たちのように、大地を飛んで獲物を狩るのが本来のイヌの姿であることを、イヌに与えられた鳥の名が暗示しているのではないだろうか。

イヌをおそうイヌの話

猛禽類にも比すべきイヌの英雄について、次のような話を聞いたことがある。「わたしの養父には、二匹の名犬がいたのよ。ブルゲドとハンガルよ。ブルゲドは、一年に一〇〇頭ものキツネをつかまえる優秀な猟犬で、ハンガルは子イヌの頃からオオカミをつかまえて有名なイヌだった。はじめは、自宅のヤギをつかんで殺してしまつたんだって。それで父は怒つたわよ。もんのすぐくぶつたんだってさ。でも才能もみとめた。ものをつかまえる血統だ、とみた。父はつないで、

何日も何も食べさせなかつたらしいわ。そうやって苦勞を知るわけよね。狩にくときには、ブルゲドを師として、子イヌのハンガルをつれていったら、オオカミをつかまえたじやないの。子イヌでありながらも、それで有名になつた。でも、やがて自転車に乗つた人を噛むようになって。それで人に毒をもられた。もともと、このイヌには人は手をふれないのよ。翌朝、母が天窓の覆いをはずしながら、家の脇で死んだように寝ているイヌをよんだの。寝ているように死んでいたの」

モンゴルのイヌは、牧羊犬に訓練されたことはなかった。ひたすら猟犬として維持されてきた、といつてもよい。ただ人間に都合のよいようなキツネやオオカミに限定されているわけではない。そこで、家畜を襲わないように訓練する必要はあつたようである。

たとえ家のまわりをうろつくだけのうにみえても、夜間ともなれば、平原から家畜群を襲いにやってくるオオカミを撃退すべく存在しているのである。トルコあたりでは、オオカミとの戦闘意欲をもたせるために意図的にイヌの耳を切る、という(松原正毅「遊牧の世界」)。昼間はオオカミがやってこないから、訪問客を威嚇する。あのチンギスハンでさえ、幼少の頃他家にあずけられた際には、イヌをこわがったのも無理はない。とはいえ、近年のイヌはだらしがらない。オオカミをつかまえることなどないらしい。そもそも敵が減る一方なのだから、戦闘力が低下したからといって、イヌは

かりせめても仕方ないだろう。ところで、モンゴル語でオオカミのことを「チョノ」という。しかし、その言葉の口にするオオカミを呼ぶ恐れがあると考えられており、人びとは「チョノ」といわずに「ノホイ」つまりイヌと表現する。先の名犬物語でもまた、オオカミは「ノホイ」と表現されていた。イヌがイヌをつかまえる、という表現になつていたわけである。だから聞いていてわかりにくかつたかわりに、オオカミとイヌとの対比的なイメージは一層きわだつた。つまり、オオカミは平原にすみ、時おり人間に近づき、その財産である家畜群を狩りにやってくる。一方、イヌは宿營地をすみかとしており、時おり狩りにやってくるオオカミを逆に狩ることになつている。優秀な猟犬でなくとも、せめてオオカミの襲来を告げるぐらいの根性はみせてくれるだろう。

猟犬といつてしまうと、狩猟に確実に役立つイヌを想像してしまう。確かにそのような名犬も存在していた。しかし大多数のイヌは、牧羊犬でないのとおなじくらい、猟犬でもない。みずから狩を行なうイヌという意味での「狩猟犬」といふておくのが、最も適当ではないだろうか。オオカミ出身でありながら、人の味方について狩ることを選んだ動物、それがそもそもイヌというものなのである。モンゴルのイヌをめぐることのようなイメージは、猛鳥の名が好んであたられていることも、うまく整合すると思われる。

(こながや ゆき・国立民族学博物館)